

動詞の共起傾向に基づく様態副詞の分類試案

著者	宮城 信
雑誌名	日本語と日本文学
巻	57
ページ	L15-L26
発行年	2014-11-30
URL	http://doi.org/10.15068/00125845

動詞の共起傾向に基づく様態副詞の分類試案

宮 城 信

1. はじめに

いわゆる語の副詞¹の分類は山田孝雄1908によれば、陳述副詞・程度副詞・情態副詞に分けられ²、それぞれのレベルでの職能を有しているとされる。本稿では、情態副詞の下位類である様態副詞に注目し、使用実態に即した体系化を試みる。

基本的に副詞とそれが構成する修飾関係は運動的である。修飾関係の種類と出現傾向(語順)については、仁田義雄1983・2002、矢澤真人2000などによって、およそ次のように示されている。

(1) 頻度修飾成分、過程修飾成分、様態修飾成分、結果修飾成分 - 被修飾部

(1)の修飾関係の認定では、仁田1983が結果修飾と結果副詞(「赤く」「平らに」など)を取り出し³、その後矢澤2000や仁田2002が頻度修飾と頻度副詞(「時々」「いつも」など)や過程修飾の一部と時間関係の副詞(「だんだん」「次第に」など)を取り出した⁴。このように分析は進められたが、一部の目立つカテゴリをなすものを除けば、情態副詞の内部はまだまだ曖昧模糊とした未整理の状態にある。特に主要な副詞群を取り出した残りである様態副詞には強くその傾向がみられる。

そこで本稿では、様態副詞に着目し、使用実態からその内実を考察していく。様態修飾はどのような条件で成立するものであろうか。仁田1983は結果副詞が状態変化を含意する動詞と共起することを指摘している⁵。とすれば、様態副詞は動詞のどのような性質と修飾関係を構成するののかということも重要な問題となろう(これを「様態性動詞」などと呼ぶのは言葉のすり替えに過ぎない)。これまで諸先行研究によって、様態副詞に所属する語の記述は進められてきたが、共起の制限や傾向については、ほぼ等閑視されてきたと言ってよい。

そのような現状に対して、本稿では、様態副詞に押し込められてきた様々な語一品詞のゴミ箱とも言われる副詞のさらにゴミ箱である様態副詞の内実一を、コーパス調査と統計的分析によって幾分かでも明らかにすることを試みる。具体的な手法は以下の通り。

1. BCCWJを資料として、いわゆる様態副詞に分類された語の使用実態(出現数の偏り)を調査する。

2. 同資料の用例の形態素解析を利用して、様態副詞がどのような動詞と共起する傾向にあるのかを調査する。
3. 統計的手法によって、様態副詞のグループ化を行い、先行研究の意味的分類と比較しながら、その妥当性を検証する。

2. 先行研究の分類

様態副詞とその周辺に着目して体系化を目指した代表的な先行研究を概観していく。いくつかの先行研究で、様態副詞の位置づけが示されている⁶。ただし、様態副詞の内部にまで踏み込んだ分類は新川忠1979や仁田2002を除けばほとんどないと言える。両者とも副詞の意味カテゴリに依る分類である点で共通し、まず大きく「典型的な動きのあり方を表すもの」と「話者の評価に関わるもの」に二分する。後者は、動詞の性質にかかわらず共起でき、事態全体に対する話者の評価を表す語⁷であるので、考察の対象から外れる。よって本稿では、前者の典型に近い動きのあり方を表す様態副詞⁸を中心に先行研究の分類を参考にして考察していく。以下に、当該の副詞を中心に先行研究の分類をまとめた。

2-1 新川忠1979の副詞分類

新川1979は、副詞を意味別に分類した初期の研究である。意味カテゴリによる分類であるため、例えば、「つよく」が「c力のつよさ」と「eはげしさ」に二重に分類されている（(2)の斜体部を参照のこと）。同じ語でも表す対象が異なれば、違う語として扱うという状況重視の分類姿勢が見られる。その結果、体系化はあまり意識されず、各カテゴリが並列的に配置される⁹。以下、(2)で概略を示す。

(2) 規定的なむすびつき

人、いきもの、物に共通する動きや変化の特徴づけ

- a はやさ：のろのろ、ゆっくり、すばやく、足ばやに
- b ゆれはば（振幅）：おおきく、ちいさく、かすかに
- c 力のつよさ：かるく、かたく、つよく
- d 声・声の質：おおきく、ちいさく、すどく、けたたましく、かすかに
- e はげしさ：はげしく、いせよく、しずかに、かるく、つよく
- f 軌跡：まっすぐに、一直線に、うねうねと
- g 面のむき：うつむきがちに、あおむけに、さかさまになって、うしろむきに

2-2 仁田義雄1983, 2002の副詞分類

仁田の分類は、1983で概略が示され、2002によってその詳細な記述がなされた。本稿では、後者に即して仁田の分類を概観する。この分類の特徴は、意味カテゴリによって、階層的な分類を示している点である。ただし、すべての語が順に関連づけられるわ

けではなく、まず典型的な動き様態の副詞として「動きの勢い・強さ」「動きの早さ」「動きの質・様」の三つを立項し¹⁰、関連する語を周辺例と位置づけるという手法を取っている¹¹。以下、(3)で概略を示す。なお、本稿で考察するカテゴリ、および様態副詞には下線を附した。

(3) 〈動き様態の副詞〉

動きの勢い・強さを表すもの

・〈動きの勢い・強さ〉を純粹に表すもの：激しく、強く／軽く、軽やかに、柔らかく、弱く

・明晰性・密着性に関わるもの：はっきり、しっかり、くっきり、きっぱり、ちゃんと

〈質・様〉への言及を含みながらの〈勢い・強さ〉

・程度量につながるもの：大きく、小さく、深く、浅く、遠く、近く

・動きのエネルギー量としての主体・対象の数量性：たくさん、たっぷり、ばらばら

動きのエネルギーの総量としての回数性：ぐるぐる、くどくど、まじまじ、どンドン

動きの早さを表すもの

動きの早さをより純粹に表すもの

・経過の早さ：ゆっくり、早く（速く）

・取り掛かりの早さ：早く（速く）、急いで、素早く、急に

・〈質・量〉への言及を含みながらの〈早さ〉：じろっと、ちらっと、ぐっと

・動きの早さとしての所要時間：すたすた、するする、てきぱき、せかせかと

動きの質・様を表すもの

・発生・付随する音：はふはふ、げらげら、かんかん、ひゅっと

・軌跡・方向性に関わるもの：真っ直ぐ、左右に、斜めに

・生じたあり様—結果副詞へのつながり¹²：白く、あかあかと

・勢い・強さなどへの含みを持つ様々な動きの質・様：ぎらぎら、キラキラ、こそこそ

(3)の分類では、「ぐるぐる」「ちらっと」「すたすた」など多くのオノマトペ(擬態語)型副詞の存在が目を引く、これらの副詞は、ほぼ定型のフレーズとして使用されるため、共起する動詞のどのような性質と副詞が関係を結ぶのかを見いだすことは難しいと考えられる¹³。よってオノマトペ型副詞を一時留保しておくことにする。本研究全体の整理の手法としては、先に制約の少ない典型的な語を分析して枠組みを画定し、その後これら特殊な語を配置するという方法によって全体像を描いていくつもりである。

3. 様態副詞の諸相

3-1 共起の制限

1. で述べたように、様態副詞と共起できるのは様態性動詞であるとするのでは意味を成さない。では様態副詞はどのような性質を有する動詞と共起するのであろうか。仁田2002が「動きそのものの展開過程の局面に内属する諸側面を取り出したもの」(仁田2002:79)とするように、典型的には何らかの動きを有する動詞の当該の側面を修飾すると考えられる。しかしながら、これらの様態副詞との共起から、動詞の持つ動きの側面を規定することは難しい。その多様性は、次の(4)からも明らかである。

- (4) a. 花子が {ゆっくり / 急いで / ちゃんと} 手を振った。
b. 次郎は、夜明けまで {ゆっくり / *急いで / ちゃんと} 待った¹⁴。
c. 昨日は {*ゆっくり / *急いで / ちゃんと} 結果副詞 スコップが庭に状態変化動詞 あった。
(cf. 飾り物を {ゆっくり / 急いで / ちゃんと / 大きく} 作った。)

諸先行研究が指摘するように、「動きのある側面を修飾する」と大づかみにすることはできても、動きの側面をいくつ想定すればよいのかという問題が残される。本稿では、使用実態の傾向から様態副詞のカテゴリを画定していく手法をとる。すなわち、動詞の意味ありきではなく、様態副詞と関係のパターンの数量的分析に基づく、修飾関係の類型化が本研究の目標となる。

ちなみに、これらの様態副詞は、(4) cf. のようにいわゆる状態変化動詞(結果を含む)とも問題なく共起することができる。したがって、先にも述べたが様態性動詞のようなものを想定することは意味をなさない。実際にどのような動詞と共起する傾向があるのかを調査し、それに基づきどのような動きの側面と関係を結んでいるのかという観点が有効であろう。

3-2 体系化に関わる問題点

様態副詞の体系化を試みると、必ずいくつのカテゴリを立項すればよいのかという問題に行き当たる。広義の様態副詞には、「濡れタオルを ぐるぐる 回す」という時の「ぐるぐる」のように回す速度を表すのか、あるいは回す幅を表すのかが判然としないもの¹⁵や、「もそもそ 起き上がった」のようにそもそも表す意味が漠然としたものなどが混在している(特にオノマトペ型副詞に多い)。結局、現在の様態副詞はその他のカテゴリ化できそうな語群を取り出した残滓であり、副詞のゴミ箱のようなカテゴリであることはいなめない。

3-3 本稿で提案する分類手法

先行研究の副詞の分類法が、目立つカテゴリの取り出しの積み重ねによって進められてきた経緯を考えれば、結果的に残された語群がゴミ箱的な性質を帯びることは避けら

れない。そこで本稿では、先行研究とは異なる分類のアプローチを採用する。すなわち動詞と副詞の共起という修飾の本質的な機能や使用実態に注目して、多くの実例データから統計的にグループ分けを行い、まとまりごとに包括的な意味を与えていくという手法である。この手法が、最終的に残り物の寄せ集め的なまとまりを作らない、バランスのとれた分類手法であると考えられる。

4. 調査

4-1 調査の方法・目的

(調査方法)

(3) の分類の語のリストを参考にして、典型的な様態副詞と思われるものについて実例の出現数をBCCWJ(「現代日本語書き言葉均衡コーパス」)を用いた検索エンジン「中納言」によって、全テキストで調査し、[表1]の結果を得た。さらに、カテゴリ毎に出現数の多いものから、(5)の10語([表1]の■の語)を代表例として抽出した。「程度性」では「大きく」「深く」などが突出しているが、様態か結果のいずれを表す副詞なのか判定が難しい(実際に(状態)変化動詞との共起例が多い)ので、ある程度の語数もあり、様態修飾が期待される「遠くに」を採用した¹⁶。また軌跡・方向性に分類される「左右に」については、特定の語との結びつきへの偏りが認められたので¹⁷、次点の「真っ直ぐに」を採用した。

(5) 強く、軽く、弱く／はっきり、
 しっかり／遠くに／ゆっく
 り、早く／真っ直ぐに／ス
 ムーズに

[表1] 様態副詞の実例出現数

	様態副詞	漢字表記	仮名表記	総出現数
強さ	激しく	1479	168	1647
	強く	5670	100	5770
	固く	753	271	1024
	厳しく	1015	154	1169
	きつく	419	0	419
	強硬に	0	111	111
	猛烈に	1	80	81
	軽く	2872	89	2961
	重く	125	0	125
	軽やかに	76	9	85
明晰性・ 密着性	柔らかく	113	449	562
	やんわりと	0	61	61
	弱く	549	1	550
	弱々しく	86	1	87
	はっきり	0	5879	5879
	ありありと	129	0	129
	くつきり	0	123	123
	きっぱり	0	168	168
	ちゃんと	0	3683	3683
	きちんと	0	2858	2858
程度性	しっかりと	0	4570	4570
	ぴったり	0	383	383
	大きく	11209	53	11262
	小さく	2962	25	2987
	深く	3104	75	3179
	浅く	169	2	171
	厚く	339	38	377
	薄く	1146	98	1244
	遠くに	1079	5	1084
	近くに	-	34	-
早さ	ゆっくり	0	2386	2386
	早く	4952	208	5160
	急いで	786	74	860
	素早く	285	218	501
	急に	1190	25	1215
軌跡・ 方向性	左右に	773	0	773
	斜めに	466	54	520
	真っ直ぐに	108	419	527
	まっしぐらに	0	54	54
	一直線に	0	0	0
質・ 様	スムーズに	0	660	660
	テンポよく	0	0	0
	なめらかに	93	158	251

(5)の語に関して、検索エンジン「中納言」によって、次のような調査を行った(資料については、末尾の[調査資料]を参照のこと)。

(6) 調査対象：全て（全テキスト）

検索条件：キー：(5) の語、後方共起 1：品詞－大分類－動詞

(調査の目的)

本調査は、次の点を明らかにすることにある。

(7) 使用頻度が高い様態副詞がどのような動詞と共起しやすいのかを明らかにする。

さらに、得られた結果に基づき統計的手法（クラスタ分析）によって副詞のグループ化を行い、先行研究（主に仁田2002）で示された意味的カテゴリによる副詞分類と対比して分類の妥当性を検証する（5-4を参照のこと）。

4-2 調査結果

それぞれの副詞がどのような動詞と共起しやすいのかを調査し、次のような基準で分類した¹⁸。(8)の下線の動詞が典型的な状態変化動詞、それに対して、波線部が典型的な動作動詞（非変化動詞）である。

(8) 主体移動（方向性を持つ主体の移動）：行く、出る、落ちる、渡る、越すなど

客体移動（方向性を持つ客体の移動）：出す、落とす、渡す、置くなど

主体動作：転がる、回る、揺れる、笑う、泣くなど

客体動作：転がす、回す、叩く、蹴る、さわる、こする など

有生存在：いる、留まる、待つ など

無生存在：ある、残る、あまる など

主体変化：変わる、曲がる、割れる、溶ける、起こる、尽きる など

客体変化：燃やす、壊す、変える、切る、消す など

心理・知覚：見る、聞く、喜ぶ、怒る など

BCCWJを資料として、各副詞と共起する動詞の実例をランダムに500例抽出した後、それらの副詞が(8)のどのような動詞と共起しているかを調査して、次の[表2]のような結果を得た。

[表2] 様態副詞毎の動詞の共起数

	強く	弱く	軽く	はっきり	しっかり	ゆっくり	早く	真っ直ぐに	スムーズに	速くに
主体移動	15	2	12	6	5	39	123	74	141	84
客体移動	8	0	3	1	12	17	25	2	40	9
主体動作	33	1	28	106	19	277	76	54	195	31
客体動作	129	13	147	12	309	65	25	21	30	55
無生存在	25	1	4	8	15	1	1	6	0	101
有生存在	0	0	0	0	0	2	0	0	0	63
主体変化	171	427	102	8	13	29	134	128	52	16
客体変化	60	47	167	279	76	21	74	141	34	22
心理・知覚	59	9	37	80	51	49	42	74	8	119
	500	500	500	500	500	500	500	500	500	500

5. 統計的分析・考察

5-1 結果の概要と分析手法

[表2]の結果から、様態副詞と共起する動詞の種類にはかなりの偏りがあることが分かる。

(本稿の分析手法)

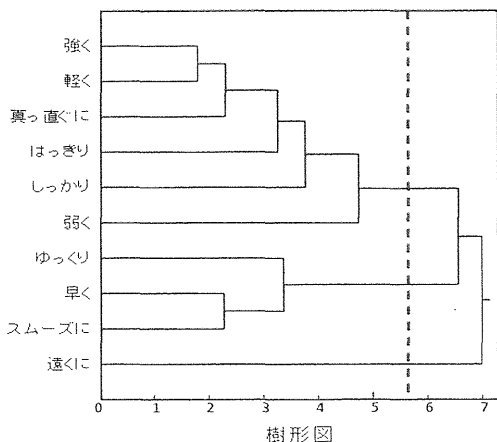
先行研究の分類は、収集した副詞群から、まとまりを成しそうな意味カテゴリを取り出すという手法で行われている¹⁹。これに対して、本稿では、出現数が上位の代表語について実態調査を行い、それを基に類似性に基づくグループを抽出し、それに即したカテゴリ分けを行おうとする試みである。

5-2 カテゴリ別に共起する動詞を見る

1. でも指摘した通り結果副詞が状態変化動詞との共起に制限されるのに対して(註5を参照のこと)、[表2]からも分かるように、様態副詞の共起の実態に関しては、特定の動詞に制限されるというようなことはない(併せて3-1も参照のこと)。ただし、「有生存在(生物が動作主体の存在動詞)」に関しては、共起例がほとんど見られなかった²⁰。一方で副詞によっては、対になる動詞で主体型に偏るか客体型に偏るかの違いが見られる場合がある。また、「強く」「はっきり」「真っ直ぐに」などのように動作型と変化型で主体型・客体型の偏りの逆転があるものもある。

5-3 クラスタ分析による様態副詞の分類① 全動詞例から見る

以上の結果を踏まえて、本稿ではクラスタ分析²¹を用いて、様態副詞語彙の分類を試みる。[表2]を資料としてクラスタ分析を行い、以下の[図1]のような結果を得た。なお、分析に際して、平方ユークリッド距離で距離を算出し、ward法を用いて分析を行った。



第一クラスタ：強く、軽く、真っ直ぐに、はっきり、しっかり、弱く

第二クラスタ：ゆっくり、早く、スムーズに

第三クラスタ：遠くに

【図1】 様態副詞分類のデンドログラム①

【図1】の結果から、様態副詞は大きく三つのクラスタに分かれることが分かる。(3)の仁田の分類に対応させて言うと、第一クラスタには、勢い・強さに関わるものと明晰性や軌跡に関わるものの一部が、第二クラスタには動きの早さと動きの質・様に関わるものが含まれる。そして、第三クラスタが程度性に関わるものである。

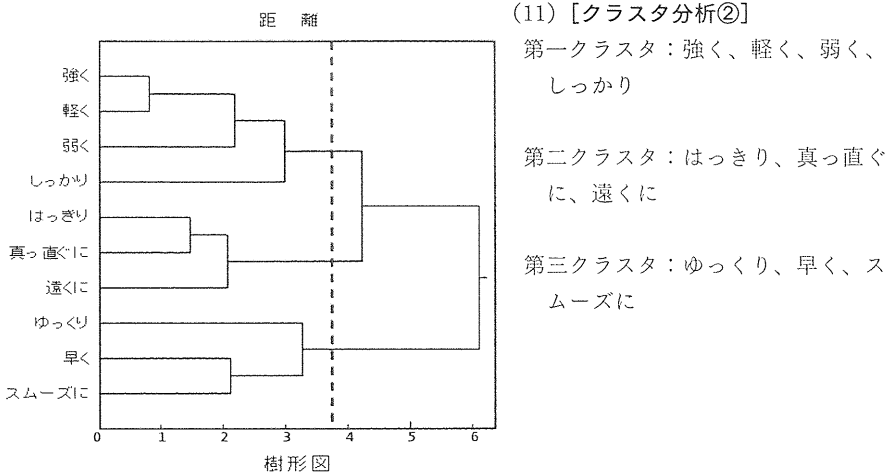
以上のことから、様態副詞は、まず強さから動きのあり方に言及した「強度言及型」と展開の様から言及した「展開言及型」に大きく二分される。「遠くに」が独立して存在する点はひとまず保留しておく。ここで、(2)や(3)の先行研究の分類と対照してみると、カテゴリ間の関係に違いが見られ、検証が必要であることが分かる。先行研究の副詞分類は雑多なものから手探りで目立つかたまりを切り出すという作業の繰り返しによって進められてきたので、最終的に独立したカテゴリとして「勢い・強さ」や「早さ」を取り出せる客観的な保証はない。それに対して、本稿の立場は統計的手法で分類した後、カテゴリの意味に解釈を加えるという手法を採用しており、直感にも反さない分類となっている。また、一般的には「強く」の対になる語が「弱く」であるとされるが、こと様態副詞の使用実態においては「軽く」の方が関連性が高いという結果が得られたことも興味深い。

5-4 クラスタ分析による様態副詞の分類② 一非変化動詞例から見る

本節では、より典型的なデータに絞り込んだ分析を行うことによって、を【図1】の分類の精度を高めていくことを試みる。以下、動きのあり方に重点を置くと考えられる典型的な動詞(変化型と存在型を除外したもの)に限定して、調査を行う。調査対象は以下の通り。

(10) 調査対象：主体移動、客体移動、主体動作、客体動作、心理・知覚（〔表 2〕を参照のこと）

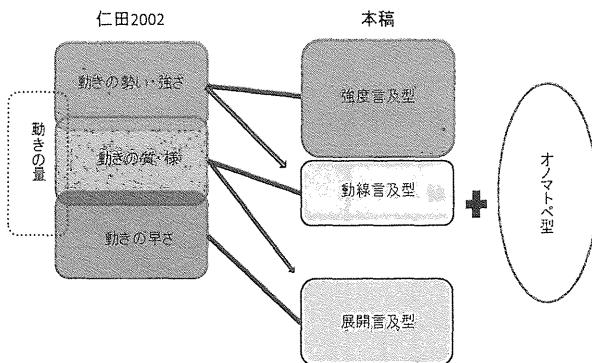
(10) に対して同様にクラスタ分析を行い、次の〔図 2〕のような結果を得た。



〔図 2〕 様態副詞分類のデンドログラム②

〔図 2〕の結果から、〔図 1〕と同様に、三つのクラスタに分かれることが分かる。ただし、その内実は異なり、第一クラスタには、勢い・強さに関わるものと「しっかり」が、第三クラスタには動きの早さと動きの質・様に関わるものが、そして、第二クラスタにはそれ以外の動きのあり方に関わるものが位置づけられた。

以上のことから、様態副詞は、強さから動きのあり方に言及した、第一クラスタと展開の様から言及した、第三クラスタと動きの様から言及した、第二クラスタに三分類される。この結果は、一見 (2) や (3) の先行研究の分類に準ずるものように思われるが、詳細に見ていくと、強さ・動きの様 (形)・展開の様という大分類に再編されたものであることが分かる。その対応関係を整理すると次の〔図 3〕のようになる。



〔図3〕 様態副詞分類の対応関係

〔図3〕で示した仁田2002と本稿の提案の異同を概説する。まず、基本的な三分類の枠組みは継承する。ただし一部所属語の移動があり、結果的に意味カテゴリの再編が要求される。まず、第一のカテゴリとして動きの強さは継承し、「強度言及型」とする。次に第二のカテゴリとして、所属語の性質を鑑み、代表性のある動きの軌跡やその明瞭性（動きの形）を表した「動線言及型」とする。同様に第三カテゴリは、やや幅を持たせて早さだけではなく、過程進行の様をも含めて「展開言及型」とする。

6. おわりに

おわりに本稿で提案する修正カテゴリ案に関して、若干の説明を加える。〔図2〕の動線言及型は、一見雑多なものの集合体のように見えるが、まとまり度は比較的高いと考えられる（〔図2〕では早い段階（左側）で結びつく方が類似性が高いことを表している）。よって、表現される側面は類似していると考え、「動線」を表す副詞群と捉えた。このカテゴリは、(3)の分類より限定的で明確な規定である²²。

最後に全体的なことを付け加えれば、註10で提出された様態副詞のより根本的な意味は何かという問いに対しては、〔図1〕、〔図2〕から、もっとも大きなまとまりをなす、「動きの強さ」に関わるものが中心的な位置を占めると言うことになる。また、子細なことになるが、本稿の立場からすれば、(3)仁田2002の分類の「明晰性・密着性に関わるもの」という意味カテゴリに属する語は、動きの強度と動線に再配置・解消される必要があることになる（そもそも明晰性と密着性に共通性を見いだすのも難しいのではないかと思われる）。

今後は〔図3〕の分類を基本として、さらに様態副詞のデータを増やしながら、微調整を行う。その後、留保しているオノマトペ型副詞の位置づけを行い（次稿に譲る）、広く動き様態の副詞を体系化できる枠組みを構築していく。

[調査資料]

中納言：コーパス検索アプリケーション KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>)

以下に中納言に用いられている形態素解析ツールの品詞分類をあげておく。

名詞、代名詞、形状詞²³、連体詞、副詞、接続詞、感動詞、動詞、形容詞、助動詞、助詞、接頭辞、接尾辞、記号、補助記号、空白（以上、16分類）

なお、今回はBCCWJの全コーパスを用いた。総語数は、104,911,464語である。

[註]

1. 本稿の副詞とは副詞的修飾成分としてはたらくものを指す。また、その出自は問わない。
2. 山田1908の「接続副詞」「感応副詞」「陳述副詞」「程度副詞」「情態副詞」という五分類による。一般に副詞とされるものは後三者で、「語の副詞」と呼ばれる。山田は、情態副詞を「この副詞は主として事物の属性観念をあらわせるものなり。」(山田1908:523)としている。また、「この情態副詞は意義によりて区分すれば頗多様のものとなるべし。」(同:526)のような指摘も見える。なお引用部分の旧漢字は適宜改めた。
3. 副詞の中に結果の状態を表すものがあることを指摘した初期の文献に、橋本1975がある。ただし、詳細な分析は行われていない。
4. 体系的ではないが用例を列挙し、副詞語彙の外延の記述を試みた新川1979は、副詞分類の概要を示した初期の研究として注目される。
5. 「結果の副詞を取る他動詞は、主体の働き掛けが対象の状態を変化させる、といった意味的あり方を取るもの、～自動詞では、主体の状態変化といった意味的あり方を取るもの～」(仁田1983:134、下線は論者)
6. 益岡・田窪1992では、「様態の副詞」「程度の副詞」「量の副詞」「テンス・アスペクトの副詞」などに八分類され、様態副詞（「様態の副詞」）はその一類をなす。また、矢澤2000では、情態副詞を「存在相修飾成分」「様態相修飾成分」「情態相修飾成分」に三分類し、典型的な様態副詞（「動質の修飾成分」）は「様態相修飾成分」の下位に分類される。
7. 仁田2002では、わざと、喜んで、故意に、うっかり、嫌々、おそろおそろなどが挙げられている。
8. 仁田も「狭義の意味での様態副詞といえば、動き様態の副詞である。」(仁田2002:80)と指摘している。
9. 新川1979の分類では、他の様態副詞と考えられる他のカテゴリとして、「とくに人の動作の特徴づけ」「現象・知覚の明瞭さ」「質＝評価的な特徴づけ」「動きや変化の進行のようす、存在のようす」などが挙げられる。
10. 意味カテゴリだけでは、動きの勢いと強さのどちらが本質的なものなのかという問題を解決することは難しい。仁田も「動詞の表す動きにとって、〈動きの勢い・強さ〉と〈動きの早さ〉のどちらがより根本的で根底的な側面であるかは、にわかには決めかねるが、～」としている(仁田2002:85)。本稿では、6. で一応の立場を示している。
11. 仁田2002の分類では、この他に「評価的な捉え方をした動き様態の副詞」「主体状態の副詞」「節的な存在の様態副詞」という六つのカテゴリが並置される。評価性を含む副詞は前二者。
12. 「銀嶺が白く輝く」「炎が赤く燃える」のような例。確かに状態変化の結果生じたものではないが、はたして様態副詞の下位類この語を位置づけてよいかは十分な検討を要する。ちなみに矢澤2000では、これらの語を「状況相修飾成分」として、明確に様態修飾語とは区別している。
13. 例えば、「ぐるぐる」は「回る・回す」、「ちらっと」は「見る」、「すたすた」は「歩く」と専ら共起する。同様の指摘が宮島1983にも見られる。結果的に共起しやすい動詞のグループから共通する性質を見出すことは難しい。
14. 共起制限を分かりやすく示すため、副詞を並列に並べているが、当然標準的な位置に表れないことによる容認性の低下がある。例えば、(4) bの「ちゃんと」の例では「次郎は、ちゃんと夜明けまで待った。」という語順の方が、容認性は高くなる。
15. ハンドルは「くるくる(小さく)」回し、濡れタオルは「ぐるぐる(大きく)」回す、と表現するのが普通の表現であることから、これらの語の違いには「(振り)幅」の違いもニュアンスとして含まれ

ていると考えられる。

16. 仁田も「高々と」などの類似する副詞の例を「まずもって移動幅・空間幅を表す様態副詞と理解される」（仁田2002：65）とするように、「速くに」は、他の程度性の副詞に比べて、結果よりも様態修飾への接近が見られると考えられる。〔表2〕で「速くに」が動作動詞と少なからず共起していることも傍証となる。なお、「近くに」（漢字表記）については、何故か検索結果がエラーになり用例数が不明。
17. 実例調査では、「左右に」は「振る」と共起する例が、全体の53.4%であった。
18. (8)の分類は、動作→存在、変化→非変化、主体→客体など動詞分類によく用いられる基準によって立項されている。動詞分類に関しては、国立国語研究所2004『分類語彙表一増補改訂版』、大日本図書株式会社やLevin, Beth, and Malka Rappaport Hovav 1993 *English Verbs Classes and Alternations*. The University of Chicago Press. なども参考し、有効であると判断される動詞の型を立項した。
19. 例えば、「動きの勢い・強さを表す動き様態の副詞で、類をなしそうなものとして、明晰生・密着性に関わるものを取り上げる。」（仁田2002：91）という記述からも、基本的に分類が取り出しの積み重ねであることが伺える。
20. 「ゆっくり」の2例は次のようなものであった。「～まあ、ゆっくり いていいよ。ぼくはぜんぜんかまわないから」（Yahoo!ブログ）、「夜になるまで ゆっくり 待って、最後の締めスペースマウンテンでこれで一応FPをとれているハニーハント～」（Yahoo!ブログ）
また、「ちゃんと」と共起できる(4)c「ある」は、単語としては存在動詞であるが、文脈から「ある」→「ない」の展開を予測させ、その過程の側面を修飾していると考えられる。
21. クラスタ分析は、データがある方針のもとで同様の特性を有するいくつかのかたまり（クラスタ）にまとめる分析手法である。データを外的基準なしに分類できることに特徴がある。
22. 「動きの質・様は、動き様態の副詞のごみ箱的存在ですらある。そういった存在に対して、〈動きの質・様〉とは、動きの展開に伴って動きに生じる視覚・聴覚を中心にした形態・様子的なありようであると、とりあえず規定しておく。」（仁田2002：113）とあるように、このカテゴリは残り物の寄せ集め感がぬぐえない。
23. いわゆる「形容動詞」の語幹相当である。

〔参考文献〕

- 新川 忠1979「〔副詞と動詞のくみわせ〕試論」言語学研究会（編）『言語の研究』、pp.173-202、むぎ書房
- 中右 実1980「文副詞の比較」国広哲弥（編）『日英比較講座2巻文法』、pp.157-219、大修館書店
- 仁田義雄1983「結果副詞とその周辺」渡辺実（編）『副用語の研究』、pp.117-136、明治書院
- 仁田義雄2002『副詞的表現の諸相』ひつじ書房
- 橋本四郎1975「修飾一連用と連体一」『日本語と日本語教育一文法編一』、pp.151-176、文化庁
- 益岡隆志・田窪行則1992『基礎日本語文法一改訂版一』、くろしお出版
- 宮城 信2011「概数量副詞の語彙体系 ―〈数量構文〉と〈語彙マップ〉」『語彙研究』9、pp.95-102、語彙研究会
- 宮島達夫1983「情態副詞と陳述」渡辺実（編）『副用語の研究』、pp.89-116、明治書院
- 矢澤真人1983「情態修飾成分の整理 ―被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察」『日本語と日本文学』3、pp.30-39、筑波大学国語国文学会
- 矢澤真人2000「副詞的修飾の諸相」仁田義雄 他（編）『日本語の文法 1 文の骨格』、pp.187-233、岩波書店
- 山田孝雄1908『日本文法論』、宝文館

（みやぎ しん 富山大学 人間発達科学部）